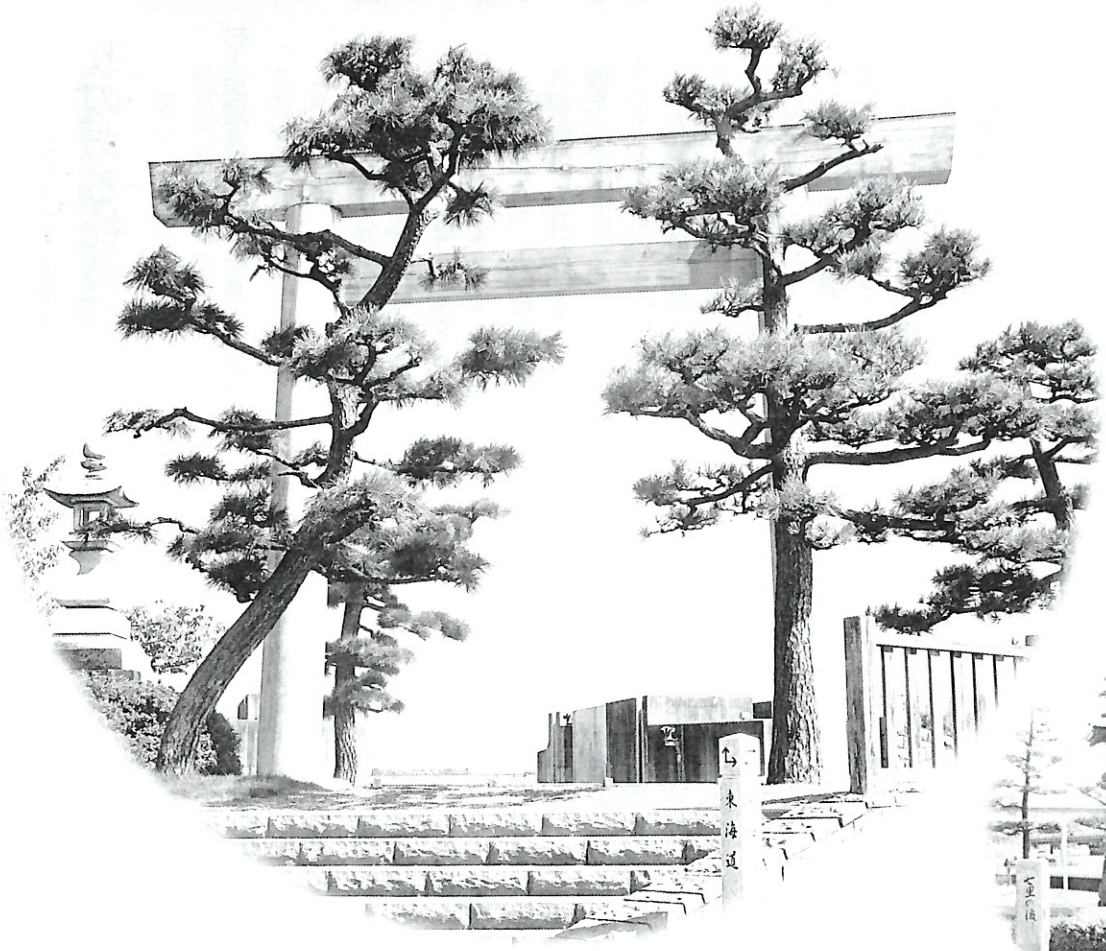
村上忠順翁顕彰会報



桑名七里の渡し

宮の渡し（撮影：酒井）

村上忠順翁顕彰会報　第２８号

編集　村上忠順翁顕彰会事務局
発行　平成２９年３月３０日

★ 目 次 ★

・思いやりのある社会づくり　2
・歴史探訪「佐屋街道を往く」に参加して　3
・「阿野・有松・熱田の旅」に参加して　4
・村上忠順と橘東世子　4 - 6
・平成２８年度活動報告　6 - 7
・忠順大賞入賞作品　7 - 8

思いやりのある社会づくり

村上忠順翁顕彰会 会長　近藤光良

昨年末の大きな話題といえば誰でも想像がつく。アメリカ大統領にトランプ氏が選出されたことです。この話題は現在も多くの問題を世界に投げかけています。これはアメリカに限ったことではなく、イギリスの国民投票の結果によるEU離脱も同じような現象です。こうした現象が、EU加盟国内でも起こりつつあるようです。直接の原因はシリアなどからの難民がヨーロッパに押し寄せたことから始まります。

しかし、これは難民を契機にして発生しましたが、いろんな学者によると世界経済のグローバル化とIT化により、かつての経済的中間層が消え、格差社会が広がりつつあり、中間層の不満が表面化した結果である、と言われています。もっと言うと、これまで世界の主流であった民主主義が崩れつつある、とも言われています。

ほかの国より自分の国の方が、ほかの人より自分が優先されるべきだという社会が生まれつつあり、嘆かわしい時代となってきたように思います。

私事ですが、小学校時代に先生に言われたことがあります。桶に水を張り、その中にマジックボールのようなものを浮かべます。少しでもたくさん集めようと自分の方に手でかき集めます。すると、ボールは自分のほうから反対方向にどんどん離れていってしまいます。逆に相手にボールを流してあげると反対にボールは自分のほうに返ってきます。つまり、相手に対する思いやりは、ひいては自分の得になるのだ、ということをその先生は教えてくれました。

さて、昨年の村上忠順翁顕彰会では、恒例の女性部会による歴史文化を巡る旅（熱田神宮～鳴海）、歴史探訪では名古屋の佐屋街道を巡る旅を実施しました。

また四方樹大学では、昨年に続き名古屋大学の塩村先生による、村上忠順翁が残した蔵書への思いと、蓮月尼との往復書簡についての講義を実施しました。多くの会員に参加を頂き感謝申し上げます。

中でも、塩村先生のお話の中で、まず忠順翁の蔵書に対する思いとして、集めた書物を後々まで大切にしてほしい、と家族等に伝える文面には心を動かされます。忠順翁は約二万五千冊の書物、しかも当時の文化を象徴する一流の本、苦労して集めた書物を何とか後世にも伝えたいという思いが強かったと思われます。そうした意志がいろんな人に伝わり、今日のような村上文庫が刈谷市に残り、多くの研究者の役に立っている訳です。同じように、塩村先生が取り組んでおられる西尾市の岩瀬文庫も貴重な書物が今日まで残され、研究材料となっています。

また、忠順翁と蓮月尼の往復書簡では、二人の間の互いに相手を思いやる心持ちがよく伝わってきます。こうした思いやりの気持ちは日本だけでなく、当時の世界の人々の心の潮流のような気がします。塩村先生が皆さんに伝えたい言葉も含め、一度今回の叢書をじっくりと読んでいただきたいものです。

今年も新たな年度が始まります。私たち村上忠順翁顕彰会もこれまで二十八年間続けてきましたが、この活動を地域の多くの皆様に知っていただくにはまだ程遠く、忠順翁の功績を伝えることも十分できていないことを反省する次第です。

村上忠順翁がこの地に残した遺産を地域の皆様に伝える方策を模索する時期になってきました。子供から大人まで地域の誇りである村上忠順翁の功績を伝えるために、彼の残した思いやりの精神で会員の皆様とともに地道に取り組んでいく必要性を感じております。会員の皆様におかれましては今年度もご支援・ご協力いただきますようお願い申し上げます。

歴史探訪
「佐屋街道を往く」に参加して

高岡町　岡本修司

平成二十八年十月十九日(水)、雲一つない快晴日和、絶好の天気の中、顕彰会歴史探訪は予定通り出発しました。会長の近藤市議の挨拶があり、市議は公務があり、欠席となりましたが、交通事情も渋滞にあうこともなく、順調に目的地へと向かいました。

今回の旅行では、コンパクトにまとめられた行程表と近世交通図と、要所要点解説が全員に配られ大変参考になりました。

道中、事務局の方の献身的なアシストと配慮には、たいへんありがたく思いました。

近藤銈司さんによる歴史的背景と地形的事情、その中で忠順さんが辿ったこの旅の困難さ等をこと細かく解説くださいまして、より関心が高まり、すばらしい小旅行となりました。

我々現代に生きる人にとっては考えられない当時の交通事情・人の歩行による手段しかない事を考えると、忠順さんがこの旅を通して、いかに大変だったかを少しでも垣間みる事ができました。

今回の参加者は三十六名、一人も脱落することなく、無事に帰路につき、家にたどりつけた事は、本当に細かい配慮が行き渡っていると思いました。

佐屋街道散策も、かなり歩きましたが、みなさん最後まで歩き切ったこと、その途中愛西市の市木、槇の木のそばで咲く金木犀の芳香の香りをかぐことができ、またそれが今回の参加者一人一人に元気と勇気を与えてくれました。

足の悪い方、速くは歩けない年老いた方も、全員が一人も脱落することなく完歩できたことは、本当に嬉しく思いました。

参勤交代を諸大名がする時に、これは本当に戦争に行く覚悟と、何ものにも負けないどんな邪魔ものにも負けない行軍だったと聞きましたが、まさに行軍録とは、そういうことだったのでしょう。

そして熱田(宮)から桑名までは、七里の渡し船による移動であった事。

後に佐屋街道が、裏街道(姫街道)として出来て以来、岩塚・万場・神守・佐屋宿に至る四宿六里の道程で、佐屋湊から佐屋川を下り桑名への三里の渡しをあわせて、九里の道のりがあり、海路に比べ少し遠回りになったことも、よくわかりました。『東海道宿村大概帳』によれば、東海道五十三次で一番宿場が多かったのが、熱田(宮)の宿で、本陣二軒、脇本陣一軒、旅籠二百四十八軒で一位。二番目が桑名の宿で、本陣二軒、脇本陣三軒、旅籠百二十軒だったとのこと、あらためて、船便欠航時に備えた大きな宿場町が、この二つであったとのお話には、全員が「ふうーん」とうなりました。

佐屋はまた、大正末期の総理大臣加藤高明を輩出した街でも有名だそうであり、昭和に突入する当時の護憲内閣として、あまりに有名な人でありますが、昭和初期の混沌とした時代に、普通選挙法と治安維持法も同時に成立した時代の時の人を作った街でもあるそうです。愛知県に歴代総理大臣が居たとは、また新しい発見でもありました。

佐屋街道散策

今回の顕彰会の歴史探訪では、まったいろんな人と出会い、いろんな人のお話をうかがえたことも、大変有意義でありました。

津島神社にて

帰路の途中、トヨタ会館に立ち寄り、未来の車ミライ、トヨタのＨＶ車等を拝見しました。トヨタに住む我々にとって、車社会が今後どんな変化をしていくのか、関心のあるところであります。

バスは、つるべ落としで夕刻せまる中、無事に出発地である農村環境改善センターに到着しました。

今回の歴史探訪は、初めて参加させていただきましたが、楽しく有意義でした。また様々な点に御配慮された事務局の方々の御苦労に感謝を申し上げて、つたない私の旅行感想記とさせていただきます。ありがとうございました。

「阿野・有松・熱田の旅」に参加して

堤町　石川千代子

回覧版の中に「会員の方も、会員でない方もご参加下さい。」という村上忠順翁顕彰会からのチラシを拝見して、友達五名と初めて参加させていただきました。

有松会館にて

今回の女性部会の研修会は初めての所ばかりで、楽しみにしておりましたが、トヨタ産業技術記念館とノリタケの森は時間が少なくて残念でした。半日ぐらい時間が欲しかったと思いました。でもそういう所があることを私は初めて知りました、収穫です。また何時かゆっくり行って見たいと思います。

熱田神宮は何度も参拝しておりますが、神宮の森にユニークな場所があるとは知りませんでした。こころの小径、美しくなる泉など七箇所のパワースポットを、探しながら散策しました。悠久の森のマイナスイオンのお蔭でしょうか、パワースポットの効力でしょうか、ゆったりとした時を過ごし、身も心も癒されました。

他には、昼食の蓬莱軒のひつまぶし、美味しかったです。有松絞り会館、桶狭間古戦場なども初めてでした。お蔭様で有意義な一日を過ごすことが出来ました。

この研修会で、古き歴史のあるもの、そして新しき物づくりなど、近くに私の知らない場所がいっぱいあるんだなあと思いました。新しい発見にはわくわくします。また次の企画を楽しみにしております。色々お世話になり、有難う御座いました。

高徳院にて

村上忠順と橘東世子

東京都立小岩高等学校主幹教諭
國學院大学講師　中澤伸弘

＊　＊　＊　

元年に出雲の森為泰に千巻舎の歌を乞ひ、その後の『六華集』にも「千巻舎の歌」があり、この書簡にも名付けたことが見えるので、幕末から明治初年には出来てゐたとも考へられよう。

○「神無月末のふつか」付書簡（明治五年）

（略）まことや十日の菊をおもふ斗のほぎ歌　沢におくらせ給ふみこころしらひにほだされていそぎ室田の翁におくりぬ　さくらのとぢめになし　かはやらむかたもあらず　翁も秋の比この京にようのぼりてみやび言あつめてまどゐせんとのこころしらひに　遠近のみやびをのうたあつめて侍りぬ（略）

こたび琉球人まうでぬ　帝よりふりはへて御使ありとぞ　かしこみつゝ宜野湾朝保と申六十斗の司人外廿人にもまゐ来ぬ　朝保大人歌人にてやまと人もつめはへはるるばかりのうたよみ手跡もうるはしかめれども　二たびのまどゐに出ていと馴はべりぬ　□□ばまたこんと契りつつ神無月のつきたちの日に國へかへりぬ　薩州にて餞別のまどゐせさせ給ふ時　雨後紅葉とふ当座題出ぬ　そを朝保

雨晴れてなほ紅葉はかわかぬ
はかへるたもとによそへて
ぞみる

などとうめき出しぬ　かしらはね上り花の彫たるかざしに　□ちをくるくると巻付外に耳かき一本さして　ひげ長く供の人にも左の如くながらへてはめづらしき人にも馴れぬとおもえ侍ればいささか申しあげぬ（略）

書中にある室田の翁は、上州室田の関橋守のことである。橋守は明治六年春に自分が古稀を迎へた記念に『古稀賀歌集』を刊行してゐる。五十歳の時に『賀五十齢歌集』、六十歳の時に『耳順賀歌集』を編んでゐるのでその続きである。東世子が忠順から言はれて、気づいて祝歌を詠んで送つたことが判るし、橋守がこの年の秋に上京しこの祝賀の歌を集めてゐたことも判る。本により若干の相違があるが架蔵本には二百十三人の歌が載る。忠順の歌も東世子の歌もまた養子の道守の歌もある。

後半は琉球使節についての記事である。明治五年九月二十八日に皇居の吹上茶屋において明治天皇に拝謁した使節のことは『明治天皇紀』に見え、そこで副使の宜野湾朝保が歌を詠んだこともわかる。東世子はそのことをはじめ筆跡や、帰途の薩摩での「雨後紅葉」の題の歌のことにまで触れて、またその顔つきまで詳細に忠順に告げてゐるのである。もしかすると見たり会つたりした縁があつたのかもしれない。書状に年号はないがこの記事から明治五年の十月のこととなる。

○月日不明書簡（明治九年）

ここのをしへ子うた好きなる人しきりにおもひおこして　世の人々の歌集めて明治歌集てふすり巻おもひたちぬ　夫に付ても君のをしへ子たちもとたびたびおもひつつ何くれと過して大かた事なりて近き内にすりてささげぬ　されど二ノ巻もと覚侍れば猶も驚かしおくになむ　おのれもことし七十の齢にて生たる□□のみなん　物わすれがちになりぬさらば七十の賀ともそそのかす人もあれど　そはさておきて守部廿七回冬照十三回にあたれば此五月の二十六日向嶋長命寺においてしるしらぬ人々打つどひ魂祭いとなみ侍るに歌人たちあまたとはせ給ふて（略）祭して心も落居侍りぬ。往時如夢てふ題にて侍れば（略）何れも何れも世のさまかはりて心も落居ははべらねど　いき有内はながらへ侍らんと覚え侍りぬ　をさなきよりやしなひたてたる　今年廿四になりて人並にもおとつとしより海軍省兵学寮へまゐりて日々つとめ侍りぬ　歌も巧みによみてこたびの明治の家集板下などかかせ侍りぬ　おのれもをとつとしの七月より大教院ノ内女教院九汲に拝命致し候よりおもしろくも有　をかしくも有扨々かはりはてたる世の中にながらへて何ひとつ跡にのこさん事もなくひとつひとつとくらし居ぬ（略）

明治も十年近くなると、随分と生活に変化があつたやうで、それを嘆く文が続いてゐる。この書簡には『明治歌集』初編の刊行のことが書かれてゐる。その為この書簡を明治九年とした。忠順の歌は初編に見えるので、東世子の依頼もあつたのであらう。そのため「近き内にすりてささげぬ」と近いうちに謹呈するとのことである。二編も予定してゐることも告げてゐるし版下は道守が書いてゐることも判る。『明治歌集』はこの後も継続され、東世子が歿したあとも道守によつて九編（明治二十三年）まで刊行されてゐる。忠順は晩年の六編（明治十七年）まで出詠してゐるし、そこには序文をも寄せてゐる。

又「守部廿七回冬照十三回」を五

月二十六日に向嶋の長命寺において行つたこともあり、追悼歌の題が「往時如夢」であつた。自分は七十歳で物忘れが多いが大教院へ出たりしてゐる様子が伺へる。「女教院九汲」とは何かわからないが、歌の指導でもしてゐたのであらうか。一方養子道守は二十四歳でこちらは海軍省兵学寮に勤務してゐる由である。東世子は明治十五年十月七十七歳で逝いたが、前年には忠順編になる熊代繁里の『櫻蔭集』に序文を寄せてゐて、最後まで厚い交流があつたのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

平成二十八年度　活動報告

○　四月十七日

＊定例総会

参加者百十八名

総会の様子

＊記念行事

・西山万歳

堤小学校郷土芸能クラブのみなさん

＊「忠順大賞」表彰式

＊記念講演

「村上忠順と大小暦」

講師

中澤　伸弘先生

講演風景

○　七月六日

＊女性部研修会

「阿野・有松・熱田の旅」

参加者四十五名

・トヨタ産業技術記念館

・ノリタケの森

・熱田神宮

・高徳院

・桶狭間古戦場

・有松絞り会館

・有松町並み

有松町並み

○　十月十九日

＊歴史探訪

「佐屋街道を往く」

参加者三十六名

・宮の渡し公園

・桑名七里の渡し

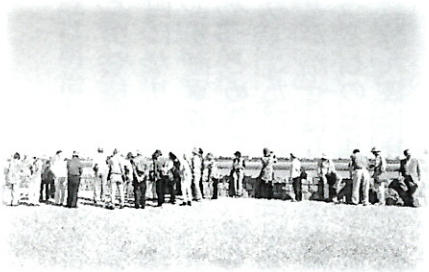
・津島神社

・佐屋街道散策

・道の駅　立田ふれあいの里

・トヨタ会館

トヨタ産業技術記念館にて



長良川河口堰近くにて

○　八月六日・九月三日
十月一日・十一月五日
＊四方樹大学
参加者延べ六十二名
講師　名古屋大学大学院教授
塩村　耕先生
講義内容
・「蔵書目録」
・「手紙文」

講義風景

○　十一月二十三日
＊忠順翁命日墓参

※忠順翁の墓石に書かれている句
「丈夫能磨久心乃白玉者
移天理徹良牟天地之共」
今年度の四方樹大学において、塩村先生が解説をしてくださいました。詳細は、叢書をご覧ください。

忠順大賞入賞作品

応募期間　十一月二十三日から
一月三十一日
応募総数　一七七九首
入賞者　二十名
選者　久米翠雲先生

入賞された二十名の方とその作品を紹介します。

○　小学生の部

豊田市長賞
駒場小　四年一組　石川　晴仁
お母さんいっしょにいると楽しいよ
見あげた背中ぼくおいつくよ
※お母さんと仲良しなんだ。心も体も大きくなって母に追いつきたい。「見あげた背中」にぬくもりと大きさが分かる。

豊田市教育委員会賞
堤小　四年一組　沼崎　千昂
どこまでも見えたあの日のあの景色
スカイツリーで王様気分
※その日は天気が良かったんだね。「王様気分」でその時の感動と爽快な気分がよく伝わってきます。

会長賞　金賞
駒場小　二年一組　宇都宮椿希
おこっても泣いてもわたしおこられる
なぜかかわいい弟たいき
※弟がかわいくてしかたがないようすが、よくわかります。たいき君はしあわせですね。

会長賞　銀賞
堤小　六年一組　安田　佳穂
おいっこのおねだりに負け財布開け
にこっと笑顔に連敗中
※買い物に行くと、おいっこのかわいい笑顔に負けて財布のひもがゆるみ、何か買ってしまう。下の句がいい。

会長賞　銅賞
堤小　六年二組　増田　柚花
しんしんと畑に積もる粉雪で
キラキラ光るまほうの世界
※真っ白な銀世界の雪景色の美しさを下の句によく表現しています。感動をすなおに表現しています。

中日新聞社賞
駒場小　一年一組　吉田　有花
はずかしいドキドキだけどゆう気出し
声かけてみて友だちふえた
※あたらしいお友だちをつくることはたいへん。勇気をだしたことがすごい。よかったね。上の句がいいです。

優秀賞
堤小　四年二組　福田　実桜
書き初めは　初めて金賞もらえたよ
ほう告するのにドキドキしたよ
※練習したかいあって金賞。家族にほう告するのに胸がドキドキしてしまった。うれしさがよくわかります。

優秀賞
堤小　三年一組　杉山　司樹
おもちつき返し手じいちゃんぼくはつく
やわらかペッタンふんわりするよ
※三年生でもちつきはたいへんです。やさしいおじいちゃんが、つきやすいようにかけ声などかけて、よかったね。

優秀賞
堤小　二年五組　松永　咲希
雪がふるわたがしみたいおいしそう
わりばし持ってあつめに行こう
※雪ふりのうれしさを、「わたがし」にして割りばしで集めるという思いつきがたいへんいいですね。

優秀賞
堤小　二年三組　山下はるひ

わだいこをバチでたたいてドドドンコ
うでにかんじるたいこのリズム
※わだいこがだいすきですね。下の句にむねにまでひびく、その感動がよく表されています。

○　中学生・一般の部

豊田市長賞
前林中　三年八組　山下　智弘

道歩き　先へ先へと　行く僕に
ちょっと待ってと言う母笑顔
※元気のいい君は、母も同じように歩けると思った。しかし、母よりも元気で強くなった。下の句は母の喜びの顔。

豊田市教育委員会賞
高岡町　早川　寛子

大寒の集合場所へ来る子等の
吐く息白く白く昇れり
※大勢の児童が集合場所に集まる。寒い朝、子供らの吐く息は白い。幾筋も晴れた空に昇る。下の句がいい。

会長賞　金賞
前林中　三年三組　赤瀬　太一

腕の中抱きかかえれば眠るのに
置いたとたんに泣き出す赤子
※妹かな、弟かな。大好きなんだね。泣くとまた直ぐに抱っこしてしまう。子守してくれてお母さんも大喜び。

会長賞　銀賞
前林中　二年五組　田中　梨湖

弟が大人に見える時がある
シュートが決まったその瞬間
※サッカー大好きの弟が、パスされたボールを見事ゴールした瞬間、弟が大人に見えた。かっこいいですね。

会長賞　銅賞
前林町　甲村サカエ

笑む夫の遺影に元気いただきて
ひねもす畑で一汗流す
※遺影の夫は笑顔で優しい。その写真の夫から元気を貰い、一日中畑仕事で汗を流した。寂しいが幸せですね。

中日新聞社賞
前林中　二年五組　神近　晏那

いつの間に肩を並べる母の背と
愛の深さは越えられない
※両親に愛されて、いつの間にか母と肩を並べるほどに育ててくれた。下の句に母への感謝の思いが溢れる。

優秀賞
前林中　一年七組　甲村　尚大

半年前新品だった僕の靴
汗の分だけきずも増えたね
※半年前に買ってもらった運動靴。部活でグランドを駆け回った。汗も溢れた。靴に傷もついた。下の句いいね。

優秀賞
前林中　三年八組　酒井　花菜

帰り道周りに広がる田畑で
私を迎える祖父の笑顔よ
※私が学校から帰る頃、祖父はいつも畑から「お帰り」と迎えてくれる。私も笑顔で返す。嬉しさ一杯。

優秀賞
前林中　一年五組　石橋　龍和

震える日兄に飛びつき温まる
これぞ僕らの家族のカイロ
※寒くて震えるような日。学校から帰って、兄がいると兄に飛びついていく。兄は僕のカイロだ。面白い！

優秀賞
前林中　三年四組　長原　昂暉

家帰りただいまと言うと　お帰りと
その一言で心安らぐ
※いつも出迎えてくれるのは誰かな長原君は幸せだね。誰か家にいてくれて、笑顔のやり取りができて。

編集後記

江戸時代、宮宿と桑名宿の間は東海道における唯一の海上路で、移動距離が七里あったことから、「七里の渡し」と言われました。海上を避ける迂回路として佐屋街道があり、陸路を六里、水路を三里で桑名に至りました。忠順翁は、この佐屋街道を利用したそうです。今年度の歴史探訪でこの佐屋街道を訪れました。現在は当時の水路はなく平野が広がり、国内有数のレンコン栽培地となっていますが、翁の足跡を少しは感じることができたと思います。

また、桑名七里の渡し場跡にある鳥居は、式年遷宮ごとに伊勢神宮宇治橋の外の鳥居を移し建て替えられます。平成二十七年に新しくなり、「伊勢国の一の鳥居」として、今も訪れる人を出迎えてくれます。

本年度も、本顕彰会を支えてくださった方々、またこの会報を発行するにあたり御協力いただいた皆様に心より感謝いたします。

（事務局　酒井）